



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道のワイン産地形成におけるテロワールの形成のメカニズム：地域資源の「翻訳」と「構造」の適合モデル
Author(s)	松山, 元樹
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第16767号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16767
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99612
Type	doctoral thesis
File Information	MATSUYAMA_Motoki_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称 博 士（農学） 氏名 松 山 元 樹

審査担当者 主 査 教 授 板橋 衛
副 査 教 授 東山 寛
副 査 准教授 清水池義治
副 査 准教授 小林 国之（国際食資源学院）

学 位 論 文 題 名

北海道のワイン産地形成におけるテロワールの形成のメカニズム —地域資源の「翻訳」と「構造」の適合モデル—

本論文は、「北海道のワイン産地形成におけるテロワールの形成のメカニズム —地域資源の『翻訳』と『構造』の適合モデル—」と題し、近年急速に発展する北海道ワイン産地を対象として、制度的統率主体が不在な状況下における産地形成の動態を、社会学的・地域研究的視点から解明したものである。

本研究の特徴は、テロワールを自然条件の単なる所与としてではなく、人間と自然、さらには多様なアクター間の相互作用を通じて事後的に意味づけられる「社会的構築物」として捉え直し、その形成過程を「地域資源の翻訳」と「ネットワーク構造の適合」という独自の分析枠組みによって理論化した点にある。とりわけ、地域資源の存在形態とネットワーク構造との機能的適合が、テロワール形成の成否を左右するという問題設定は、新規性と理論的独創性を有している。

研究方法として、後志および空知という性格の異なる産地を対象に、ワイナリー・ナラティブの質的分析（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）と、イベントのデータをもとにした社会ネットワーク分析を組み合わせることで、意味形成のプロセスと関係構造の双方を実証的に明らかにしている。

具体的には、後志地域における「美的・体験的価値への転換」と、それを可能にする橋渡し型ネットワーク構造、ならびに空知地域における「倫理的・生産的価値への深化」と結束型ネットワーク構造という対照的なモデルを提示し、地域資源の特性に応じた異なるテロワール形成の論理を明確に示している。さらに、余市町におけるワイン産業と水産業の連携事例、三笠市におけるジオパークとの協働事例を通じて、理論モデルを具体的実践のレベルで検証しており、理論と実証の往復が十分に達成されている。

また、本論文が提示する「関係論的テロワール」および4象限マトリクスによる整理は、北海道ワイン産地にとどまらず、制度的空白下にある他の地域産業や地域ブランディング政策への応用可能性を有しており、学術的意義のみならず実践的含意も大きい。

以上のように、本論文は、明確な研究課題設定、独創的な理論枠組み、適切かつ厳密な分析手法、ならびに豊富な実証にもとづく説得的な議論を備えており、農学ならびに地域研究分野において高い学術的価値を有する成果である。よって、本論文は博士（農学）の学位論文として十分な水準に達していると判断され、博士の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

よって、審査員一同は、松山元樹氏が博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。